

「畑耕一文学資料展」を開催して

石田 浩子（広島市立中央図書館）

一 はじめに

広島市立中央図書館では、平成二三（二〇一一）年五月二日から六月三

〇日まで二階展示ホールにて、企画展「畑耕一文学資料展」を開催した。

広島市堀川町（現中区）に生まれた畑耕一（一八八六一―一九五七年）は、戦前から小説家、劇作家、また評論家としても活躍し、疎開のため安佐郡可部町（現広島市安佐北区）へ移った後は、生涯を広島で過ごし、戦後の文芸復興に尽力した人物として知られている。

当館は昭和六二（一九八七）年十月に広島文学資料室を開設し、広島にゆかりのある著名文学者二名の初版本や自筆資料などを収集しており、現在、所蔵資料点数は三万一〇〇〇点を超えている。畑耕一も収集対象作家の一人であ



企画展会場風景

り、畑の甥である渡辺白蘭氏をはじめ、生前の畑と親交のあった方々からのご寄贈、ご協力によって、自筆資料や愛蔵品なども加えられた関係資料は、図書、雑誌、自筆原稿類、書簡等合わせて約四五〇点となり、畑耕一の文学や人物像を伝えるコレクションとなっている。

この当館所蔵資料とともに、企画展のために出品いただいた資料も加え、図書、雑誌類六三点、自筆資料四〇点など、資料一四〇点を展示した本展は、畑耕一を単独で取り上げた、初めての企画展であった。

二 経歴を探る

畑耕一は、広島好文芸を語る上で欠かせない人物の一人であるものの、没後五〇余年を経た現在では、その活動を記憶している人も少なくなりつつある。また、戦前からの多彩な経歴にも関わらず、人名事典、文学事典等に畑について詳細な記載がないことや、畑自身が過去のエピソードを書く際に、具体的な年代をほとんど示していないこともあり、その経歴には詳らかでない部分も残されている。今回の展示の目的は、畑耕一関係の文学資料を構成することで、畑の生涯とその多彩な活動を紹介することであったが、これまでに発表された畑に関する評伝は限られており、展示の準備を進める中で、作家の基本情報である年譜の作成が大きな課題となった。

当館の所蔵資料に、畑自筆の履歴書がある。住所を疎開先の可部町とし、国民新聞社学芸部長を務めた昭和十三（一九三八）年までの履歴が記されたものである。しかしながら、明治二〇（一八八七）年生まれ、大正十一（一九二二）年東京帝国大学卒業、昭和元（一九二六）年松竹キネマ入社としている点などは、確認作業の結果、事実と異なることが分かり、年表の典拠として使用できなかつた。

畑の生年については、平成十九（二〇〇七）年十月三日付の中国新聞において、「広島市出身の作家・畑耕一年齢一〇歳若く自称」との記事が報じられた。畑の戸籍の確認によって、明治十九（一八八六）年生まれと判明した、との内容である。この記事が出るまで、昭和三二（一九五七）年十月六日付、中



可部での畑耕一

国新聞夕刊の畑の
訃報記事が、明治
二九（一八九六）
年生まれと報じた
のに対し、同八日
付毎日新聞が明治
十九年生と報じた
ように、畑の生年
については諸説が
あった。例えば、『日
本近代文学大事典』

（日本近代文学館編 講談社 昭和五二年）など多くの文献では、「明治二九年生まれ」を採用し、畑の活躍中に発行された大正十四（一九二五）年の『演劇新潮』一月号掲載「現代劇界人名録」、あるいは昭和五（一九三〇）年発行の『明治大正史 第十五卷 人物篇』^①のように、明治二三（一八九〇）年生まれと記した資料も残されている。年譜作成に使用する典拠については、慎重に確認せざるを得なかった。

年譜の作成作業の中で、多くの手がかりを与えてくれた資料に、この企画展のため、渡辺白蘭氏より提供された一冊のスクラップブックがある。畑自身、あるいは愛子夫人によって作成されたこのスクラップブックには、各掲載紙（誌）名や掲載年月日が記載されていないものの、昭和二七（一九五二）年頃から畑没後に至るまで、畑に関する様々な新聞記事や、畑が寄稿した文芸誌からの切り抜き、さらには新聞社からの原稿料送付の通知書などが貼付されている。新聞記事には、旧制第八高等学校（名古屋市 一九〇八年設置）で一緒だった魚澄惣五郎氏（広島大学名誉教授 一八八九—一九五九年）と当時を回想する対談記事もあり、畑耕一の晩年の活動だけでなく、青年時代を知るための大変貴重な情報源である。表紙に書かれたタイトルが「耕一集 一九」であることから、以前から同様のスクラップ作業が継続されていたと推察されるが、残念ながら現在確認できるのは、この一冊のみである。

以下、企画展の構成に沿って、畑耕一の生涯を紹介していく。

三 畑耕一と広島（一）

畑耕一は、明治十九年、広島市堀川町に漆屋の長男として生まれた。生家は畑平蔵を主人とし、仏壇製造に使用する漆を商った問屋であり、明治十六（一八八三）年に刊行された渡辺葉之助編『広島諸商仕入買物案内記並二名所志ら遍』^②にも掲載されている。「萬漆処」を掲げ、「金銀鎮鍮錫鉛鎔金具梨子地 粉色々 絵ノ具類刷毛数々 蒔絵筆色々 弁柄色々 割籐数々 墨膠 きぬ糸 色々 右之外塗物用諸品数々」と、取扱商品が列記されている。

畑は小学校に進むと、商家の長男という家庭の事情によるものであろうか、大阪へ預けられた。

畑の代表作『広島大本営』（天祐書房 一九四三年）の巻末に載せられた「著者略歴」は、年は特定されていないが、自身の経歴を記した数少ない手がかりの一つである。これによると、「日清戦争当時広島市に生を享けた」、「小学校中途にして大阪なる某家に預けられ、府立師範附属小学に転じ」、「市立大阪高等商業学校に入ってその予科を終えた」。さらに名古屋へ移り、「第八高等学校第二部（工科）に学ぶこと一年」、「更に転じて第一高等学校第一部（文科）より東京帝国大学英文科を出た」、「直ちに東京日日新聞社」に勤務、となっている。

東京日日新聞社入社時期に関しては、大正七（一九一八）年九月十三日付の読売新聞文芸欄に「畑耕一氏は此程東京日日新聞社へ入社せり」との記載があり、『広島大本営』の記述の通り大学卒業後間もなくの就職であれば、畑は三二歳にしてようやく東大を卒業、就職したことになる。

商業学校を卒業してから、紆余曲折を経て東大英文科に入学するまでの一時期、畑は故郷に戻っていたようで、広島にその足跡が残されている。

『中国新聞六十五年史』（中国新聞社 一九五六年）によると、明治四〇（一九〇七）年頃、中国新聞紙上の中国文壇への投稿者のうち、常連となっていた人々によって詞友会が結成された。この幹事として畑歙逸（耕一）が参加

しており、同書に掲載された、明治四〇年八月二十八日に催された第三回中国文壇詞友会の参加者の集合写真にも写っている。

さらに、明治四五（一九一三）年に、同じく中国文壇から芝居好きの同志によって作られた天下泰平十一日会へも、畑は名を連ねているが、これら間もなく、翌大正二（一九一三）年には、『三田文学』二月号に「怪談」を發表して文壇デビューを果たしており、活動の場を東京へと移している。

処女作発表後の畑は、『三田文学』や『早稲田文学』、『帝国文学』などへ作品を發表しており、先の就職を伝える新聞記事のように、その動向を報じられるだけの存在感を文壇に築いていたものと思われる。

四 多方面にわたる活動

東大卒業後、東京日日新聞社へ入社した畑は、学芸部担当記者となる。

学芸部担当記者としての畑耕一の名は、志賀直哉の「暗夜行路」發表にまつわる動きの中で、近代文学史上に現れてくる。

大正九（一九二〇）年当時、大阪毎日新聞と東京日日新聞で連載中であった菊池寛の「真珠夫人」に続く長編小説を掲載すべく、畑や志賀、大阪毎日新聞社学芸部部長薄田泣菫（一八七七一—一九四五年）らの間で話が進められていた。志賀から、東京日日新聞社側の担当者である畑に宛てた大正九年八月二七日付の葉書には、連載用に二〇回分の原稿を準備している旨が書かれている^③。結局、「暗夜行路」は、直前になって志賀、新聞社双方が、作品の内容が通俗小説欄よりも創作欄向きであると判断したことによって掲載が断念され、翌年『改造』誌上に連載された。

大正十三（一九二四）年、東京日日新聞社を退社した畑は、松竹キネマに入社する。新聞社退社の理由は不明である。畑は、歌舞伎を中心とした芝居全般への造詣が深く、記者時代から足繁く劇場へ通い、劇評「戯場壁談義」を『明星』大正十一年二月号から翌年八月号へ連載していたが、松竹キネマに入ってから、「陸の王者」（監督／牛原虚彦 一九二八年）、「女性の切札」（監督／野村芳亭 一九三二年）など、多くの現代劇映画の原作を書いている。

この時期、日本映画はサイレントからトーキーへと移る過渡期にあたり、関東大震災からいち早く復興を果たした松竹キネマにおいても、田中絹代や岡田嘉子、高田浩吉といった俳優陣を起用して盛んに映画が製作された。畑は、研究所長、企画部長を歴任したことから、多くの俳優を育てたとされ、当館では、「贈 恩師畑耕一先生」として、松竹キネマ蒲田撮影所第一期研究生であった笠智衆（一九〇四—一九九三年）ら俳優、監督、製作スタッフの名前が記された文箱を所蔵している。

松竹キネマと兼任して、畑は大学の教壇にも立っている。大正十四年に明治大学の講師、昭和二年には同大教授となり、はじめは「文芸概論」を担当、のちに自らの実務経験を活かして、「ジャーナリズム研究」、「映画研究」を講じ、映画研究部顧問も務めた^④。また、日本大学にも籍を置いて、「演劇講座」や「ジャーナリズム論」を担当し、ほかに上智大学や早稲田大学などの講座や講演会へも招かれ、演劇論を講じることもあった。

昭和十（一九三五）年頃からは、国民新聞社学芸部長として再び新聞社勤めを始めており、戦前の畑は、作家のほか、新聞記者、映画人、大学教諭を兼任し、昭和十五（一九四〇）年に全ての職を辞するまで、最も華やかな活動を見せた。

五 戦前の執筆活動

複数の役職を掛け持ちしていた松竹キネマ時代は、畑の作家としての充実期でもある。

東京日日新聞社時代に連載した「戯場壁談義」や、戯曲第一作の「直助権兵衛」^⑤など、雑誌への発表を中心に、執筆活動を軌道に乗せていた畑は、松竹キネマ入社を機に初の著書となる評論集『劇場壁談義』（奎運社）を出版し、以後毎年のように著書を刊行している。東大英文科の同窓である芥川龍之介が序文を寄せた短篇集『笑ひきれぬ話』（大阪屋号書店 一九二五年）、随筆集『ラクダのコブ』（大阪屋号書店 一九二六年）、野村芳亭監督により映画化された長編『棘の楽園』（博文館 一九二九年）、句集『露座』（素人

社書屋 一九三一年) など、その内容も多岐にわたっている。

映画の原作となった『棘の楽園』や『毒唇』(先進社 一九三二年)、『女の切札』(春陽堂 一九三三年)など大衆小説に大別される長編小説や、『少年少女譚海』昭和二(一九二七)年四月号から連載した「剣魔白藤幻之介」に代表される少年小説、少女小説も多く発表しているが、畑作品の個性は、むしろ短編や随筆に表れている。博学に裏打ちされ、ユーモアに富んだ随筆は、古典や国内外の伝説、説話などを題材としており、特に『触角と吸盤』(交蘭社 一九三五年)に収められた「季節と茶話」は、季節から連想される短文を歳時記の形式でまとめたもので、大正から昭和初期に好評を博した薄田泣菫による『茶話』への意識も感じられる。

このほか、畑は多蛾谷素一の筆名を使って歌謡曲の作詞を手がけており、「浅草行進曲」(塩尻精八作曲 一九二八年)や「ザッツオーケー」(奥山貞吉作曲 一九三〇年)は流行し、映画にも使用された。昭和四(一九二九)年、広島市で開催された昭和産業博覧会に際しては、中国新聞社が制定した「広島市歌」(永井建子作曲)を作詞しており、譜面とともに『広島大本営』に収録されている。

昭和十五年、畑は全ての勤めを辞め、創作に専念する生活を選ぶが、その後の作品数や内容に、以前と大きな変化は見られない。その中であって、「大東亜戦争は、實に、日清戦争をもつてその端緒とする。」(小序より)との視点から、日清戦争の銃後史として書かれた『広島大本営』は、畑の作品のうち特異な存在であり、代表作の一つとなっている。

六 畑耕一と広島(二)

激しくなる空襲を避け、昭和十九年二月下旬に安佐郡可部町へ疎開した畑は、終生この地で暮らした。疎開から間もなく、同年六月二五日付の読売新聞に寄せた「お国自慢 広島」では、可部の人々を「親切で明朗」と表現し、あくまでも一時的な滞在と認識していたのか、文章全体にやや安楽な雰囲気もあるが、「自分にできることなら郷土文化面のためになんでも働く覚悟であ

る。」の一文は、戦後広島における後半生と重なってくる。

畑の戦後の活動は、昭和二〇(一九四五)年十二月、栗原唯一、貞子夫妻が中心となって発足した中国文化連盟への、顧問としての参加から始まった。東京から郷里の山県郡壬生町(現山県郡北広島町)へ疎開し、ともに顧問となった細田民樹(一八九二—一九七二年)らと、同連盟主催の講演会で講師を務め、昭和二二(一九四六)年八月に『中国文化』が創刊されると、これに寄稿を続けた。

当時の全国的な動向と同じく、被爆によって甚大な被害を受けた広島においても、街の復興とともに雑誌の刊行が相次ぎ、『中国文化』に先だって創刊された『新椿』(一九四六年三月創刊)や『郷友』(同六月創刊)のほか、『世代』(一九四九年一月創刊)、児童雑誌『ぎんのすず』(一九四六年八月創刊)などへ、畑は作品を寄せている。

文芸以外では昭和二二年秋に結成された「我等の劇団」で演劇指導にあたり、昭和三〇(一九五五)年八月から亡くなる直前の、昭和三一(一九五七)年九月にかけて、ラジオ番組「たつのおとしご」(ラジオ中国)を担当した。古今の逸話などを話題に織り交ぜた番組は三〇〇回余り放送され、当館には「おてならい」、「風呂について」、「猿の小話」など十二編の番組用原稿が残されている。

さらには、昭和二三(一九四八)年六月の第二回ミス・ヒロシマ審査会の審査員を務め、昭和二九(一九五四)年の新日本リーグ発足に伴って広島カープの二軍を広島グリーンズと命名し、昭和三一(一九五六)年の改名では、広島カープグリナースと名付けるなど、地元の文化人として様々な場へ登場した。

ただし、戦後に刊行された著書となると、『少年時代小説 神変快剣士』(三幸出版社 一九四八年)、『ロビンソン・クルーソー』(広島図書 一九五〇年)、『工場生活七十年』(一九五一年)に限られている。このうち、『ロビンソン・クルーソー』は、『ぎんのすず』を発行した広島図書による「銀の鈴文庫」の一冊として出版された、ダニエル・デフォー作品の抄訳であり、『工場生活七十年』は、現マツダ株式会社の創業者である松田重次郎氏(一八

七五―一九五二年)の評伝である。畑は、可部に居を構えて以来、亡くなるまでの十三年余りの間に様々な出版物へ多くの文章を書いたものの、その作品群を自著という形で残す機会には恵まれなかった。

畑自身は、昭和二二(一九四七)年九月十二日付の東京の知人四宮美智子に宛てた葉書で、「とにかく、郷土広島の復興を見るまでは動かないつもりです。文化方面の復興にはいろいろ仕事をしています。」と、広島での活動に対する使命感とも自負とも受け取れる思いを伝えていた。しかし、各地へ疎開していた作家らが、都市機能と経済の回復した東京へ戻り、活動を再開させていた昭和二八(一九五三)年になると、「このままでゆけばいつまでも広島にいなければなりません。それも戦争のためです。とにかく東京へ帰る気は棄てません。」と、現状に対する焦りや、断ち切れない上京への意欲を率直に打ち明けている。

昭和三二年十月六日、上京の思いは果たされないうまま、畑は胃がんのため広島赤十字病院で生涯を終えた。畑が亡くなった日の毎日新聞には、「ベッドの上でいろいろ考えたことがあるので、こんど退院したら『ヒロシマ』という題で小説と随筆の中間のようなものを書きたいと思う」と、病床で語ったコラムが掲載された。

七 ライフワークとしての怪談

当館へ寄贈された自筆資料の中に、二〇点の翻訳草稿がある。原著者は、M・R・ジェームズ、モーパッサン、リチャード・ミドルトンなどで、いずれの内容も怪奇小説または幻想小説と呼ばれる短編作品であるが、特に注目されるのは、M・R・ジェームズの作品十五点と「作者の言葉」を合わせた翻訳草稿である。

イギリスのM・R・ジェームズ(一八六二―一九三六年)は、ケンブリッジ大学副総長やイートン校校長を務めた古文書学者であり、その研究の傍ら怪奇小説を執筆した。彼の作品は、現在もイギリス怪奇小説の古典として高く評価され、根強い人気を保ち、版を重ねている。M・R・ジェームズの著作の

うち、畑が翻訳した原著は、翻訳作品十五点全てを収録し、「作者の言葉」を序文に持つ、『Collected Ghost Stories of M.R.James』(Edward Arnold社 一九三二年)と考えられる。

今回の展示に際して、渡辺白蘭氏から新たに提供された資料の中に、畑耕一に宛てられた一通の航空書簡があった。差出人は、『Collected Ghost Stories of M.R.James』を出版したEdward Arnold社であり、日付は一九五一年十二月十一日となっている。その文面には、畑から十二月五日付で同書の日本語版を出版したいとの照会があったこと、Edward Arnold社としては、日本語版の出版のためには、まず、然るべき日本の出版社との契約が必要である旨が記されていた。

怪談好きで知られた畑は、デビュー作「怪談」以来、大正から昭和初期にかけての怪談文学の隆盛も背景にして、数々の怪談や奇譚、「怪談趣味の新傾向」⁽⁶⁾、「怪異劇の舞台技巧」⁽⁷⁾といった評論を書き、幽霊画の収集に熱中した。

この航空書簡によって、翻訳草稿の由来が明らかになると同時に、雑誌への寄稿や講演などが主たる活動の場となっていた晩年においても、ライフワークとも呼べる怪談の集大成として、M・R・ジェームズ作品集の翻訳、出版に向けて精力を傾けた畑の姿が浮かんできた。

なお、畑による『Collected Ghost Stories of M.R.James』の翻訳は出版されることなく、昭和四八(一九七三)年の『M・R・ジェームズ全集』(紀田順一郎訳 創元社)に収録された邦訳が、わが国では最初の出版となった。

八 展示を終えて

展示準備中、畑が暮らした可部の町を訪ねた。可部では、畑の生前、特に親交の深かった伊勢木武蔵氏が、昭和五七(一九八二)年に自宅敷地内へ畑の句碑「水すくふ 掌のしろじると 日のさかり」を建立している。企画展で写真パネルとして紹介するため撮影に伺ったところ、現在の所有者から、畑が暮らした家が現在も残っていることを聞き、その家を見る機会

も頂いた。畑の没後、家は再び貸し出されたが、生前に盛んに句会などが催され、広島の人々が集った家屋、庭ともに、ほぼ当時のままで残されており、その様子も写真で伝えることができた。

また、畑が広島東洋カープ初代オーナーである松田恒次氏に贈った自筆の画「球技百態」も展示することができた。野球を対戦中の選手と審判の計十九名を画面全体に描いた作品は、走攻守それぞれの瞬間の動きを捉らえており、大の野球好きであった畑らしい観察眼を伝えている。

当初把握できていなかった畑に関する情報や資料が、畑ゆかりの方々のご協力によって、新たに確認、紹介できたことは、郷土の作家を紹介する本展の成果の一つとなった。

展示会場で実施したアンケートでは、畑耕一を初めて知ったとの感想が多く、実際に作品を読んでみたい、また、若い人にも知ってもらいたい、との声が寄せられた。

現在、畑耕一の作品を読む方法としては、図書館の蔵書を利用するほかに、国立国会図書館がホームページで提供している「近代デジタルライブラリー」^⑧での閲覧が可能となっている。これは、明治期から昭和前期までに刊行された図書の本文をデジタル画像で掲載しているもので、畑耕一の著書からは、『戯場壁談義』、『怪異草子』（大阪屋号書店 大正十四年）など計八点を読むことができる。

当館では、企画展の開催以外に、作家の人物像や作品の魅力を伝える取り組みとして、平成二〇（二〇〇八）年より、ホームページ内に、収集対象作家の中から毎年一名にスポットを当てたweb広島文学資料室を設けている。著書や自筆原稿など実物の資料に接することのできる企画展と、利用者にとってより自由な環境で、資料を閲覧できるインターネット、それぞれの利点を生かしながら、広島ゆかりの文学者について、文学資料の活用と情報提供を目指している。

今後は、畑耕一についてもweb広島文学資料室でとりあげるなど、本展の内容を発展させながら、より多くの人が畑耕一の作品に触れられる方法を探っていききたい。

註

- (1) 『大正人名辞典』（日本図書センター 平成六年）として復刻。
- (2) 『広島諸商仕入買物案内記並二名所志ら遍』（復刻版）南海堂 昭和四二年
- (3) 『志賀直哉全集』第一七卷（岩波書店 二〇〇〇年）三六五頁掲載。
- (4) 飯澤文夫「応援歌の作詞者畑耕一」『明治大学紀要』第十一号 二〇〇七年
- (5) 『演芸画報』大正十二（一九二三）年七月号
- (6) 『新小説』大正十三（一九二四）年三月号
- (7) 『アトリエ』昭和十一（一九三六）年九月「舞台美術特輯号」
- (8) 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」(<http://dl.ndl.go.jp/kindai>)